

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K01175

研究課題名（和文）東南アジア島嶼部の高地社会におけるコーヒー栽培と貨幣経済に関する歴史人類学的研究

研究課題名（英文）Historical-Anthropological Study on Coffee Cultivation and Monetary Economy in the Highlands of Maritime Southeast Asia.

研究代表者

福武 慎太郎（FUKUTAKE, Shintaro）

上智大学・総合グローバル学部・教授

研究者番号：80439330

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、東ティモール民主共和国の高地社会のコーヒー栽培農民が、国家による統治と貨幣経済をどのように経験してきたのか、その歴史的経緯について明らかにすることを目的とした。特に後期ポルトガル帝国期(1894-1975)における税制および通貨制度、そしてインドネシア時代におけるコーヒー栽培の普及の経緯に着目した。これにより、植民地期を通じて貨幣経済への依存は極めて限定的であり、スイギュウを主な伝統財とする贈与交換経済が機能していたことを可能性について明らかにした。そして独立後、コーヒー栽培のさらなる拡大と貨幣収入への依存度の高まりによって、コーヒー栽培農民の貧困が問題化した経緯を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ウクライナでの戦争による新たな分断と対立、また格差と貧困が拡大する現代世界において、従来の政治経済システムである国家と資本主義の問題が改めて顕在化している。国家のガバナンスや市場経済への依存が緩やかである社会の研究は、現行の政治経済制度を見直しのために重要である。本研究は、独立まもない東ティモールが経験している状況に注目することを通じて、「国家なき社会」「市場なき社会」に国家と市場が生まれる経緯を示す意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the historical background of coffee farmers in the highland communities of the Democratic Republic of Timor-Leste in terms of their experiences with state governance and the monetary economy. Particular attention was paid to the tax and monetary systems of the late Portuguese Empire (1894-1975) and the spread of coffee cultivation during the Indonesian period. This study clarified the possibility that the colonial period was characterized by an extremely limited dependence on the money economy and the functioning of a gift exchange economy in which the main traditional commodity was buffalos. The paper then clarified how, after independence, the further expansion of coffee cultivation and increased dependence on monetary income caused poverty among coffee farmers to become an issue.

研究分野：文化人類学

キーワード：コーヒー 東ティモール 貨幣 贈与交換 スイギュウ タラ・バンドゥ 儀礼

1. 研究開始当初の背景

国家が暴力を生み出すこと、市場は格差と貧困をもたらし続けていることを、多くの人々が認識している。にもかかわらず、国家と市場は、政治経済システムの根幹として強い信頼を持ち続けているのはなぜなのか。

人類学は、国家と市場の影響がゆるやかな社会、または国家と市場というシステムに依拠しない社会に関心を向けてきた。そうした社会は、贈与交換という経済システムに依拠し、国家や市場に関わることなく、安定した生存基盤と平和を維持してきたことを、人類学は主張してきた。

本研究は、国家による統治と貨幣経済に、東南アジア海域世界が包摂される歴史的過程を見ることによって、国家と市場が存在する意味と課題をあらためて問うねらいがある。

2. 研究の目的

本研究は、東南アジア島嶼地域に位置する東ティモール民主共和国の高地社会に暮らすコーヒー栽培農民が、国家(税制)と市場(貨幣経済)をどのように経験してきたのか、後期ポルトガル帝国期(1894-1975)から、インドネシア時代(1975-1999)、国連暫定行政(1999-2002)を経て、独立後、現在に至るまで、文献史料調査とフィールドワークによって明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

後期ポルトガル帝国期(1894-1975)における税制度と貨幣の流入、そしてインドネシア時代(1975-1999)におけるコーヒー栽培の普及の経緯について明らかにするために、ポルトガル・リスボン大学社会科学研究所における史料調査と、東ティモール民主共和国エルメラ県における聞き取り調査を実施した。

4. 研究成果

コーヒーは東ティモールの主要な輸出作物であり、内陸の高地社会においてはほとんど唯一の現金作物である。エルメラやアイナロなどの内陸県では、8割以上の世帯がコーヒー栽培に従事している。東ティモール独立後、政府だけでなく国際 NGO も彼らの経済状況に注目し、コーヒー栽培の発展に力を注いできた。

一方、スイギュウは、東ティモールを含む東南アジア海域世界において、極めて重要な伝統財であり、諸儀礼において重要な役割がある。独立後、東ティモールでは独立後の文化復興、すなわち諸儀礼の慣行の復活に多くの人類学者が注目しているが、この儀礼用のスイギュウの需要が急速に高まっている。特にエルメラのコーヒー栽培農民は、この諸儀礼の再開に熱心であり、特にコレメタンという喪明けの儀礼などにおいて、多くのスイギュウを供犠として大量に消費している。コレメタンは東ティモールの文化的慣習を理解する上で重要な儀式の一つであり、エルメラのような父系社会では、男は妻の家族にスイギュウを供与する義務がある。このような義務は、コーヒー栽培農家に大きな負担を強いている。

こうした「儀礼的消費」による過度な経済的負担を軽減するために、エルメラの人々は、政府と協力して「タラバンドゥ」と呼ばれる伝統的な資源管理を実施した。タラバンドゥはもとも自然資源管理の手法であるが、儀礼による家畜の消費をコントロールするために初めて実施された。このタラバンドゥによるスイギュウの供養の禁止は成功したようにみえたが、実施されたのは1年間だけであり。その後、スイギュウの大量の儀礼的消費が再び行われるようになった。政府や NGO は、このような儀礼的消費がコーヒー栽培農家の貧困を招いたと考えている。

研究目的およびアプローチ

本研究では、東ティモールにおける文化復興(儀礼の復活)の歴史的背景と貧困との関係に着目し、文化復興とはすなわち贈与交換経済の復興であるという視点から検討した。贈与交換と市場経済の共存による貧困の問題を理解するために、歴史学者フェルナンド・フィゲイレド(2011、2018)、クリス・シェパード(2014)の著作などの歴史文献や、エルメラ、アイナロでの聞き取りにもとづき、19世紀以降のコーヒー栽培の導入、そして20世紀初頭の人頭税の導入の経緯を確認した。そしてポルトガル時代とインドネシア占領下の家畜の頭数の推移についても確認した。

この調査の結果、ポルトガル時代のティモール島の内陸社会では贈与交換経済が支配的であったこと、インドネシアの占領下で大規模な集会や儀式が禁止されたことで、スイギュウの需要が減少し、その頭数は3分の1近くまで激減してしたこと、独立後の文化復興により、再びスイギュウの需要が高まったことがわかった。そのため、儀礼に使うスイギュウを親族から入手するのではなく、市場で購入するという方法がとられるようになった。この調査から、「文化」が彼

らの貧困の原因ではなく、スイギュウの「商品化」が今日のコーヒー栽培農家の貧困の原因であると結論づけた。

(1) ポルトガル領ティモール高地社会へのコーヒー栽培の紹介

現在、東ティモールでは山間部であるエルメラ県とアイナロ県がコーヒー栽培の主要地域となっている。しかしこれらの地域の人々がコーヒー栽培に従事するようになったのは、1960年代に入ってからである。アイナロでは、さらに遅くて、1980年代以降である可能性が高い。

エルメラのレテフォホ村で、1960年代の風景について尋ねたところ、村の周りの斜面に焼畑が広がっており、現在のコーヒー畑の広がりは見られなかった。アイナロ県マウベシ村では、ポルトガル植民地政府による道路建設など公共工事に従事しなければならず、農業をおこなう余裕がなかったと証言する者もいた。

ポルトガル人がコーヒー栽培をティモールに紹介したのは19世紀初頭にさかのぼる。東ティモール人がコーヒー栽培に取り組むようになったのは、アフォンソ・デ・カストロ統治下(1859-1863)の時代になってからである。オランダ領東インドの強制栽培制度に触発されたカストロは、それぞれの首長を通じて子どもたちに一世帯あたり600本のコーヒーの木を植えるように期待した[Shepherd 2014:39]。彼らは収穫物の5分の1をポルトガル人に支払わなければならないが、5分の4を政府に売却することが可能であった。しかし、当時のコーヒー栽培は北部の沿岸領に限られており、内陸にはコーヒー栽培が及んでいなかった。

高地の人々がコーヒー栽培に取り組むようになったのは、セレスティノ・ダ・シルヴァ(1894-1908)の時代からである。1897年、セレスティノはエルメラにSAPT(Sociedade Agricola Patria e Trabalho)を設立し、2000haのコーヒー農園を持った[Shepherd 2014:48]。1915年からは、政府による共同植林事業が開始された。このプロジェクトでは、特に西部の領土では、各家族に600本の灌木を植えることが義務付けられていた。

アラビカ種が高地栽培に適していることが明らかになったのは、1950年代である。ティモールハイブリッドという新種が発見され、高地でのコーヒー小規模生産者の数は徐々に増えていった。

(2) ポルトガル領ティモール高地社会における貨幣の経験

コーヒーのような換金作物の受け入れは、必ずしも市場経済への移行を意味するものではない。ほとんどの人々にとって、コーヒー栽培に従事することは納税のためであった。1896年、メキシコのパタカがポルトガル領ティモールの通貨として採用され、当時のポルトガル通貨の交換レートは1パタカ=450レイスだった。このような通貨が高地住民の生活に関わるようになったのは、1906年の頭税(imposto de capitacao)を通じてである。植民地政府は住民に対し、1パタカまたは500レイスの納税を義務づけた。ただし、ヨーロッパ人が所有する500ヘクタール以上の農園で働く農園労働者や、50万本以上のコーヒー、カカオ、綿の木を植える人は免除された[Figueiredo 2011:303]。

収入のない人々は、ポルトガル政府によってプランテーションやインフラ整備などの労働に従事する必要があった[Clarence-smith 1985,1992; Shepherd 2014:51]。この人頭税の引き上げは、1911年から1912年にかけてのティモール最大の反乱戦争の引き金になったと言われている。戦争後、ポルトガルはパタカの代わりに自国通貨エスクードを導入し、190エスクードの人頭税を課している。現在価値に換算すると、農村農民の年収に匹敵する額であり、相当な負担であった。

(3) 高地における儀礼と家畜

以上見てきたように、コーヒー栽培は主に納税のためであり、ポルトガル時代を通じて高地社会で市場経済が発達したとは言えず、自給自足と贈与交換経済が依然として支配的であると言える。

しかし、インドネシア占領下で劇的な変化が起こったと言える。表はポルトガル植民地時代からのスイギュウを含む家畜の数の推移を示したものである。

	1972	1980	1987	2015
スイギュウ	135,000	24,600	36,548	128,262
バリ牛	83,000	30,000	53,593	221,767
ブタ	240,000	64,000	204,062	419,169

表 東ティモールにおける主要家畜数の推移 (Sources: Based on Aditjondro[2000] and Ministerio das Financas, Direccao Geral de Estatica[2015])

ポルトガル植民地末期の1972年には135,000頭いたスイギュウが、インドネシアによる軍事侵攻後、24,600頭に激減している。他の主要な家畜の数も減少しており、これはインドネシア占領初期の混乱が影響していると思われる。徐々に数を回復しつつある他の家畜とは異なり、スイギュウの数は1980年代後半になっても増えていない。推測の域を出ませんが、儀礼祭祀の

禁止と関係があるようです。独立後の2015年には、ポルトガル植民地時代末期と同じ水準まで回復した。

インドネシアは多くの人が集まることを禁止し、先祖代々の土地から強制移住させた。その結果、コレメタンなどの祭祀習俗は、かつてのような大規模な形で行われなくなった。その結果、スイギュウを中心とした儀礼的な交換（贈与）は、インドネシアの占領下で衰退していったように思われる。

(4) 現代高地社会における儀礼的慣習の復活と貧困

独立後、こうした儀礼が再び活発化し、伝統的財産であるスイギュウの需要が急増した。儀礼の復活は、コーヒー生産者にとって経済的な圧力となった。独立後の大きな変化は、スイギュウを親族から調達するのではなく、お金で買う人が出てきたことである。スイギュウ1頭の値段は約1,000ドルと言われており、多くの農家にとってその値段は年収を超える。スイギュウは月単位で購入するため、利子を支払うことができず、土地を手放さざるを得ない人もいた。

東ティモールの人々は今、スイギュウの売買をはじめて体験しているといえる。つまり、独立後の儀礼的慣習の復活を通じたスイギュウの商品化である。儀礼が貧困をもたらしたというシナリオは、政府、NGO、コーヒー農家自身によって共有されてきた。しかし、歴史的に見れば、「文化」が貧困をもたらしたのではなく、「お金」が貧困をもたらしたと言える。伝統的に人々は自分たちで家畜を育て、万が一スイギュウがいなければ、親族が工面する。これは一種の負債だが、お金とはまったく違い、計量的に理解されたことはない。

独立後、スイギュウの数は再び増加し、ポルトガル時代の水準に戻った。しかし、国の統計によると、エルメラやアイナロといったコーヒー栽培の中心地では、スイギュウの数はまだ少ない。山間部やコーヒー畑のため放牧地がないなど、さまざまな理由があるが、スイギュウの主な供給地はパウカウとヴィケケである。スイギュウ供給地域の人々との婚姻関係の構築は、贈与交換経済のセーフティネットとなりうる。しかし、そのようなセーフティネットを持たないコーヒー農家は、市場でスイギュウを購入しなければならない状況が生じている。

結論

「スイギュウの商品化」は、東ティモールのコーヒー栽培農家にとって、独立後に起こった新たな体験である。高地社会に関して言えば、コーヒー栽培の歴史はそれほど長くはない。ポルトガル時代の市場経済の影響も限定的であった。むしろ、高地の人たちは、お金を納税として、つまり国家権力として経験してきた。インドネシア統治下では、多くの人々が集まる儀礼が禁止されたため、贈与交換経済が衰退し、市場経済への移行が徐々に進んでいった。独立後、コーヒー栽培農地の拡大と、文化復興、すなわちこれまで禁止されてきた諸儀礼の復活は、市場経済と贈与交換経済が併存し拡大する状況を生んだ。結果として、市場経済の推進は、スイギュウをはじめとする家畜の商品化を促進すると同時に、儀礼のために必要とするスイギュウをコーヒー栽培農家が購入するために、経済的に困窮する人々が増加したとみられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Fukutake, Shintaro	4. 巻 43(3)
2. 論文標題 The Centre of the Land, the Periphery of the Nation: Wars and Migration in Southern Tetun Society, Timor Island	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国立民族学博物館研究報告/Bulletin of the National Museum of Ethnology	6. 最初と最後の頁 333-350
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15021/00009344	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 FUKUTAKE, Shintaro
2. 発表標題 Buffalo and Coffee: Resurgence of gift exchange and commodification of livestock in Contemporary Timor-Leste
3. 学会等名 TLSAPT2020 Timor-Leste: The Island and the World (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 FUKUTAKE, Shintaro
2. 発表標題 A View of Timor-leste from the frontier: Wars, Migrations, and Culture in the Southern Tetun Society
3. 学会等名 Seminario Identidades, Culturas, Vulnerabilidades, Institute of Social Sciences , University of Lisbon (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 FUKUTAKE, Shintaro
2. 発表標題 Timor-Leste visto de fora: Guerra, Migration e Cultura Tetum
3. 学会等名 Sociedade de Geografia de Lisboa, Lisboa (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 FUKUTAKE, Shintaro
2. 発表標題 Missions, Language, and local beliefs in Central Timor
3. 学会等名 11th International Convention of Asian Scholars (ICAS) 11, Leiden: Leiden University (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福武慎太郎
2. 発表標題 紛争と和解の語られ方 - 東ティモール受容真実和解委員会(CAVR)最終報告書『Chega!』を読む
3. 学会等名 日本東南アジア学会 第99回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Fukutake, Shintaro
2. 発表標題 Return of the Cross: A Study of Local Belief and Catholicism in Central Timor
3. 学会等名 1st Conference of Timor-Leste Studies Association - Brazilian Chapter (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福武慎太郎
2. 発表標題 東ティモール民主共和国20周年特別シンポジウム：2002年の「主権回復」を問い直す
3. 学会等名 上智大学アジア文化研究所特別シンポジウム
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Kelly Silva, Therese Tam, Alberto Fidalgo Castro (eds.), Shintaro Fukutake	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Casa Apoema	5. 総ページ数 244
3. 書名 Schisms, continuity and new synthesis in Timor-Leste: Proceedings of the 1st TLISA-BR Conference, Return of the Cross: A Study of Lulik and Catholicism in Central Timor)	

1. 著者名 信田敏宏、福武慎太郎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 832
3. 書名 『東南アジア文化事典』（「東ティモール」および「東ティモールの民族」の項目）	

1. 著者名 福武慎太郎	4. 発行年 2023年
2. 出版社 上智大学アジア文化研究所	5. 総ページ数 50
3. 書名 『シンポジウム記録:東ティモール民主共和国20周年特別シンポジウム:2002年の「主権回復」を問い直す』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	上田 達 (UEDA Tohru) (60557338)	摂南大学・外国語学部・准教授 (34428)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------